

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、すみだを舞台にした和歌に登場するなど墨田区にゆかりのある鳥です。

第35号 2011年(平成23年)7月発行



ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

すみだ郷土文化資料館

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html

E-mail sumida-htm@city.sumida.lg.jp

開館時間 午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)

休館日

毎週月曜日(祝日に当たるときは翌日)

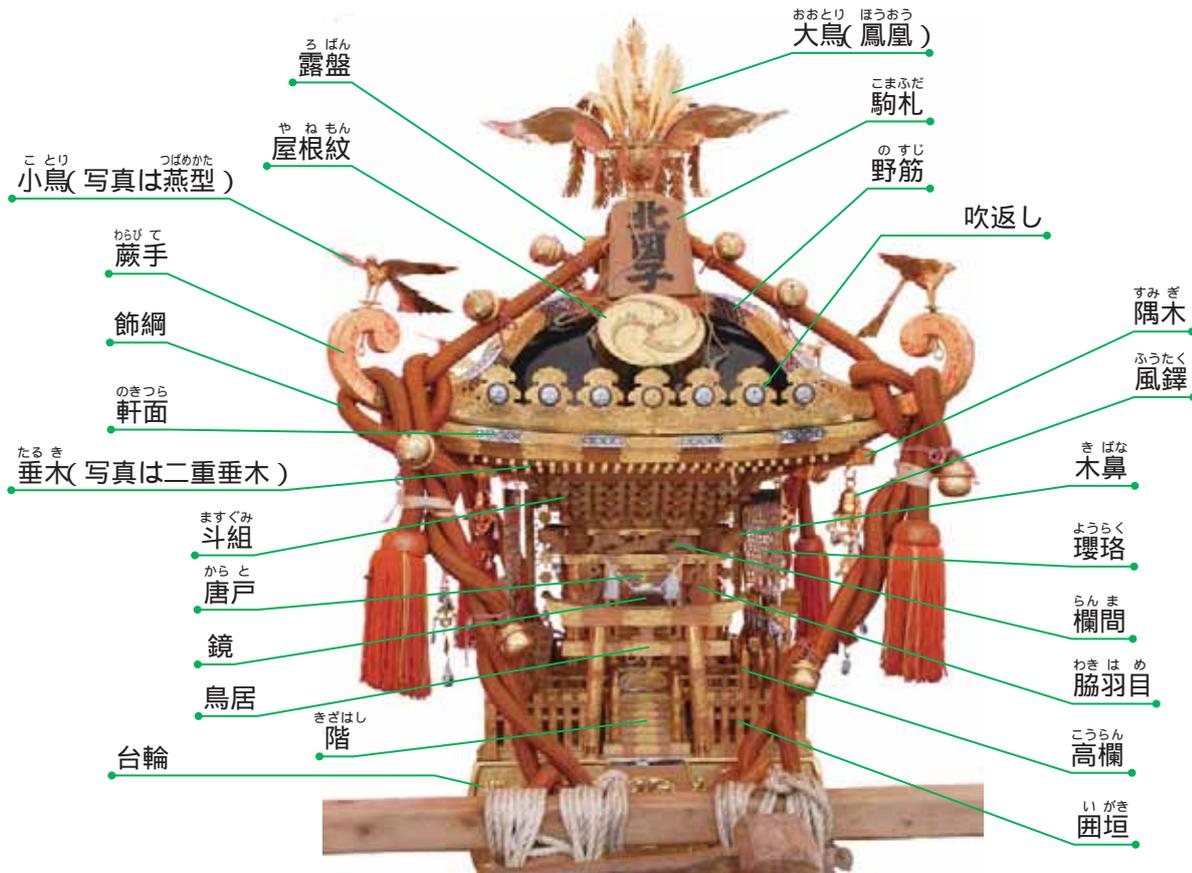
毎月第4火曜日(祝日に当たるときは翌日)

8月24日・25日

観覧料

個人100円、団体(20人以上)80円、

中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳をお持ちの方無料



北図子神輿 昭和51年(1976) 志布景彩作

企画展

神輿師 - 志布景彩

会期：2011年7月9日(土)～9月25日(日)

神輿とは、神霊を乗せ氏子区域を巡幸するもので、その起源は貴人を乗せる「輿」という乗り物にあると言われています。

その形には、四角形・六角形・八角形がありますが、全国的には四角形のものが主流です。

江戸時代に入ると神社ごとに神輿を制作するようになり、明治・大正・昭和期には、町神輿の製作が盛んに行われました。

神輿を造るには、塗師・鋳師・鍍金師・鋳物師など多くの職人の手を必要とします。その職人

たちを束ね最終的に神輿を完成させるのが神輿師です。

今回の展示では、長年墨田区で神輿制作所を営んでいた神輿師、志布景彩(正治)さんの技術と仕事、及びその作品を紹介します。

生い立ち



家族写真 中央後の少年が志布さん

大正6年(1917)1月24日、山形県村山市の桶職人の家に生まれた志布正治さんは、幼少より手先が器用な少年でした。昭和6年(1931)、14歳のとき上京し、生家と同じ木を扱う仕事であることから、浅草小島町の鹿野神輿製作所に弟子入りしました。大正11年に開業し、後に、名神輿として知られる江戸神社本社神輿を生み出した工房で、志布さんは神輿師としての道を歩み始めたのです。

二度の戦争応召をはさみ、12年間の修行ののち、昭和21年(1946)に台東区松葉町で独立した志布さんは、昭和24年(1949)に浅草の老舗祭具店宮本卯之助商店から依頼され、浅草神社一宮二宮神輿の設計・造営に携わりました。

また、昭和30年(1955)には、蔵

前神社の本社神輿を造営しました。蔵前神社は八幡神と天神の二柱の神が合祀されていることから、吹返しや蕨手、彫刻の意匠を工夫し、鋳師安部長次郎や彫刻師佐藤光重などといった名だたる名工とともに神輿を完成させました。この時の吹返しと蕨手の図柄は意匠登録されています。

昭和48年(1973)に墨田区東向島4丁目に工房と住居を移転した後も、地元北図子や中図子の町神輿など、数々の神輿を造営しました。

神輿師とは神輿の原型となる木地部分を製作し、各部の彫刻や金属装飾のデザインを決定し、塗師・彫刻師・鋳師・鋳物師・組紐師・鍍金師など多くの職人に指示を出して、神輿を完成させる神輿の総合プロデューサーというべき職人です。そのため、木地をつくる技術(木工)はもちろんのこと、神輿を構成するあらゆる分野の技術に精通している必要があります。

志布さんの技術は高く評価され、昭和57年(1982)に労働省(現在は厚生労働省)により卓越した技能者(現代の名工)として表彰され、昭和59年(1984)に伝統文化ポラ特賞、黄綬褒章をそれぞれ

受賞しました。そして、昭和62年(1987)には、墨田区登録無形文化財技術認定保持者になりました。

その後も、平成2年(1990)6月に亡くなるまで、神輿師として神輿の設計・造営・修理を続けていました。

神輿の構造



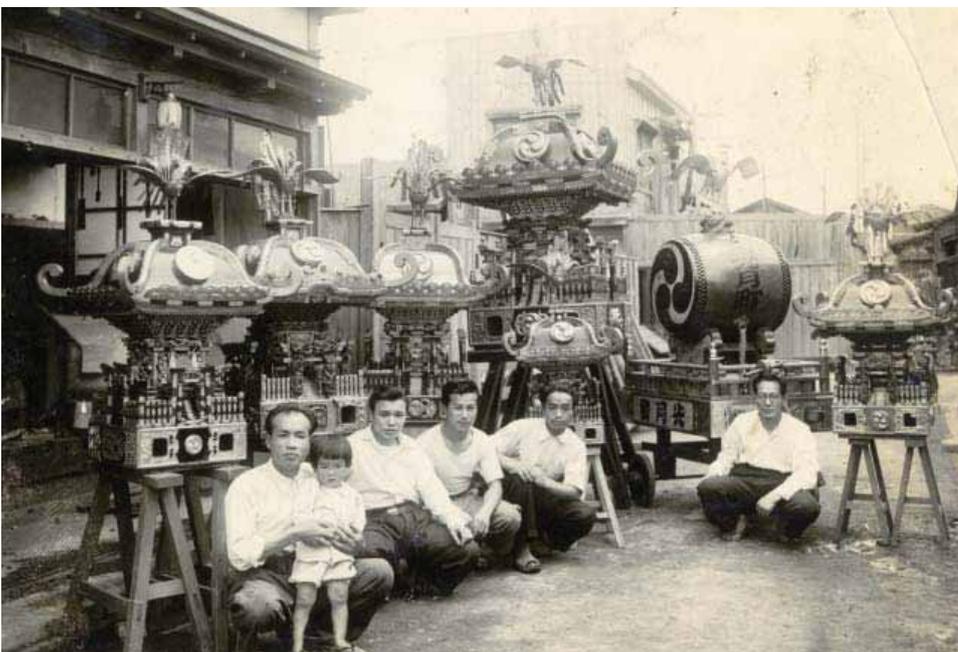
二重垂木(北図子神輿)

神輿の構造は、下から、台輪・胴・斗組・屋根と大きく4つに分けられます。それらを神輿内部で中柱や芯棒が連結しています。

台輪は神輿の一番下の部分で、担ぎ棒を取り付けるための棒穴が開けられています。志布さんは、側面に丸みを持たせた三味線型や、小ぶりの台輪をかさねる二重台輪を多く手掛けています。二重台輪にするとその分、手間と技術が必要になりますが、担ぎあげたとき小台輪分神輿が高くなり、神輿の姿がよく映えるため、志布さんが好んだ型でした。

胴(堂)は、神霊を乗せる部分です。多くは正面と背面が唐戸になり、両側面の胴羽目や唐戸の脇羽目に彫刻が施されます。胴の周囲には囲垣がめぐらされ、階と高欄が取り付けられることもあります。

斗組は、屋根の重さを胴に均等に伝える重要な役割を担う部分で、大小数百の斗と腕木を正確にくみ上げる必要があります。釘などで連結されていないため、神輿が担ぎあげられ、もまれたときの衝撃を吸収するクッションの働き



台東区松葉町志布神輿製作所にて弟子たちと 向かって左端が志布さん 昭和20年代



屋根部分を製作する志布さん

もしています。

神輿の屋根の形には、^{のべやね}延屋根型、^{はぶ}破風型、^{やつむね}八棟型などがあり、神社の種類や、依頼主の希望によって決定します。軒下には、^{たる}垂木が取り付けられます。志布さんはより装飾性の高い二重垂木にすることが多かったようです。

神輿の全体的な印象や見栄えは木地のシルエットで決まります。そのため、志布さんは独自の寸法を考案しました。

通常は台輪に対し、屋根の^{のきつら}軒面の長さは3割増し程度に造られるようですが、志布さんの神輿は4割増しの寸法につくられています。神輿の大きさは、一番下の台輪の寸法で表しますが、同じ大きさの神輿でも、志布さんのものは一回り大きく見えるのです。

また、全体の高さは若干低めとし、軒面のすっきりとした反りの曲線から^{あし}蕨手につながる、「姿の良い神輿」を目指していました。

神輿の装飾

完成した木地には、装飾が取り付けられ、仕上げられます。

神輿の装飾で見所の一つである彫刻は彫刻師が担当しました。

出来上がった彫刻は、^{あし}胸羽目や^{わきはめらんますみぎ}唐戸の脇羽目・欄間・隅木などに、はめ込まれました。また、彩色が必要な場合は、彩色師に依頼しました。

金具飾りには、上から、大鳥・小鳥・^{あし}蕨手・^{やねもん}屋根紋・吹返し・^{ようらく}瓊瑤・^{ふうたく}風鐸・^{ぼうばなかな}台輪角金物・^{のすし}棒鼻金物などがあります。野筋や垂木・鳥居・^{あし}蕨垣・^{あし}階・高欄にも細かい金具が取り付けられます。

大鳥の足や^{あし}蕨手、^{かさ}風鐸の笠、^{いものし}台輪金物、棒鼻金物などは^{いものし}鑄物師に注文します。志布さんがデザインし

木型を作り、特注で鑄造してもらったこともありました。大鳥、小鳥、^{ようらく}瓊瑤、その他の飾類は鑄師に発注します。金具類はその後、^{めつきし}鍍金師のもとで、鍍金が施されました。瓊瑤や^{ふうたく}風鐸は鑄師が製作した部品を、志布さんの妻と娘たちが^{しんちゆう}真鍮の針金で編み、完成させました。まさに、一家総出の神輿制作が行われていたのです。

屋根や^{あし}胸・斗組・^{あし}蕨垣・高欄・^{あし}階などは、それぞれ仕様を決められた上で塗りに出されました。

多くの職人の手を経て、再び神輿師のもとに各パーツが戻ると仕上げが行われます。塗りが完了した屋根に垂木を取り付け、斗組を組み直し、彫刻類をそれぞれの場所にはめ込み、金具類を、真鍮の釘で打ち付け神輿を組み立てていきます。^{あし}蕨手・小鳥・大鳥を取り付け、最後に組紐師が制作した紐類を飾り付けると、神輿の完成です。

*本文執筆にあたり、以下の書籍を参考にいたしました。

吉羽和夫『最後の職人御神輿師 六代目伊豆守則直の技と道具』1980年12月25日

『月刊文化財』287号 1987年8月1日

手中正『宮大工の技術と伝統 神輿と明王太郎』1996年4月10日

『美の壺 神輿』2008年9月20日



瓊瑤を編む志布もと代さん

墨田区内に残る志布さん造営の神輿

…… 白鬚神社の氏子、北図子・中図子・巴図子の各図子に志布さんが造営した神輿が残されています ……

北図子神輿

北図子の町神輿は昭和51年(1976)に造営された、白木造りの神輿です。その2年ほど前より仕上げ前の神輿に蕨手や鳳凰など金属の飾りをつけた状態で貸し出され、担がれていました。



左：仕上げ前 右：仕上げ後

白木造りの神輿は塗の神輿より手間がかからないように思われますが、実は、堅い檜けやきを材料とするため、刃物の扱いが難しく、また木目の出方に注意を払って木取りをしなくてはならないため、一番難しいとされ神輿師の腕が試される神輿なのです。

胴羽目の彫刻は牡丹唐獅子ぼたんからじし、欄間には鶴の彫刻がはめ込まれ、木鼻には獅子が取り付けられています。

屋根は黒漆塗りの延屋根型で志布さんらしい優美な線を描く軒面と細い胴が特徴の、白木の木目が美しい神輿です。

中図子神輿

中図子の町神輿は昭和54年(1979)に造営されました。屋根は延屋根型、台輪は担いだ時に見栄えする二重台輪となっています。朱塗りで先に飾りがつけられた美しい二重垂木と、龍頭が取り付けられた総金箔の斗組が明るい印象の神輿です。



二重垂木の仕上げをされる中図子神輿

志布さんの使用していた道具類の中に、中図子神輿の尺杖(建築現場等で用いられる棒状の道具。物差しの役割をする。神輿制作にも使われ、各部材の寸法や位置が刻まれている。)が残されていました。他の尺杖が、「2尺」や「1尺8寸」など、寸法のみ記されている中で、中図子のものは「2尺2寸ノベ中図子 但シ屋根と台輪2尺3寸応用」と墨書きされており、中図子神輿独自の寸法の割り出しが工夫されていたことがわかります。

巴図子神輿

志布さんが亡くなる直前に制作していた木地を、志布さんの妻もと代さんと弟子が仕上げた神輿です。志布さんが亡くなった後、平成3年(1991)に完成しました。

路盤の四方には四神の彫刻、両側面の胴羽目にはそれぞれ、「高砂たかさご」と「天岩戸伝説あめのいわと」の彫刻がはめ込まれています。金箔がほどこされた斗組には龍頭が付けられ、胴の柱隠し、隅木、囲垣の親柱にも龍の彫刻が取り付けられているなど、彩色された様々な彫刻が神輿を飾っています。瓔珞と吹返しには巴図子と打ち出された特注のメダルが使用されており、とても壮麗な神輿です。

二重台輪、軒面の曲線など、志布さんが造営した神輿の特徴を備えており志布さん最後の作品といえます。

(専門員 高塚明恵)



「天岩戸伝説」を主題とした胴羽目彫刻

…… 平成23年度展示の御案内 ……

1. 資料館

タイトル	開催期間
レガッタ展	平成23年 4月 2日(土)～ 7月 24日(日)
花火展	平成23年 5月 14日(土)～ 8月 28日(日)
すみだの風景100選第4期ノミネート展	平成23年 7月 1日(金)～ 7月 31日(日)
神輿師 - 志布景彩	平成23年 7月 9日(土)～ 9月 25日(日)
空襲画展	平成23年 7月 30日(土)～ 平成 24年 3月 25日(日)
伊藤製パン展	平成23年 9月 4日(日)～ 11月 27日(日)
まちができる - 本所開拓と社会資本整備 -	平成23年 10月 8日(土)～ 12月 11日(日)
忠臣蔵展	平成23年 12月 3日(土)～ 平成 24年 1月 29日(日)
七福神展	平成23年 12月 23日(金)～ 平成 24年 2月 19日(日)
雛人形展	平成24年 2月 11日(土)～ 4月 1日(日)
隅田川展	平成24年 3月 3日(土)～ 平成 25年 3月 31日(日)

2. 立花大正民家園

タイトル	開催期間
雛人形展	平成24年 2月 17日(金)～ 3月 4日(日)

*立花大正民家園は、東日本大震災により現在休園中です。*展示内容、開催期間は変更する場合がありますので御承ください。

【資料提供のお願い】

墨田区は、震災と戦災のために多くの歴史資料が失われています。特に、江戸時代や明治時代の古文書資料はほとんど残されておりません。お家のなかに、このような資料がございましたら、ぜひ郷土文化資料館までご一報をお願いいたします。